

# 街角に生きる

184



池尻中にある1軒の小さな民家。「ワークレッツシュ」という表札のかるこの家では、昼から夜8時まで、幼児や小学生たちがにぎやかに過ごしています。

ワークレッツシュは、「夜間までの地域型学童保育」という独自のスタイルで、地域に根ざした子ども支援を行っている特定非営利活動(NPO)法人。昨年9月、ワークレッツシュの理念に賛同した主婦や大学教員ら14人の発起人が集まって設立しました。その活動は新聞やテレビにも

広く取り上げられ、注目を浴びています。

スタッフは5人。家の中では輪番制のスタッフが子どもたちをサポートしておやつづくりや勉強も。疲れたらソファに寝ころんでもかまいません。こうした日常活動のほか、子どもが安心して育つことのできる社会環境を考えるために、性教育や非暴力の学習会も行っています。今月からは来年度の新規会員の募集を開始し、それに向けてワークレッツシュの体験利用を呼びかけるなど、精力

的な毎日を送っています。

ちなみにワークレッツシュの言葉

は、「ワーク」(働く、機能する)と

「クレッツシュ」(家、保育所)という意味の英語から和久さんが考えた造語。新しい子ども育成の形を指す名詞として一人立ちし始めています。

和久さんは元学習塾講師。活動を

立ち上げた背景には、偏差値重視の

教育や放課後の過ごし方に対する疑問

などがあつたようですが、自身の

生い立ちも影響しているとも。

「母は子どものころから勉強好き

で新聞記者を志望していたのに、女

だからという理由で違う道に進ま

れ、生涯女である自分を否定し続け

ていました。夫である父とも不仲で

けんかが絶えず、そのせいか良くも

悪くも私という人間を高波のように

飲み込んでいました。母は私が8歳

のときに46歳の若さで他界しました

が、私は、親がけんかするの母が

亡くなったのもすべて自分のせいだ

とずっと思っていました。でも、フ

エミニズムの勉強をするうちに悪い

のは自分でも母でも父でもない。そ

れは社会構造の問題なんだと気付い

たのです。狭山に移り住んで多くの

人と出会い、私自身が育てられまし  
た。子どもが健全に育つには、多様  
なかかわり方を生み出す地域の力が  
必要だと思えます」。

子どもたちと一緒に地域のいろい  
ろなところに顔を出しているうち、

近所の人たちから励ましの声や協力  
をもらうことも増えました。そんな

パワーのおかげで、ますます力が出  
るといふ和久さん。

「細胞には太古からの遺伝子情報  
が刻まれているようですが、いま私

の細胞には楽しい記憶が日々刻まれ  
て、ざわめいている感じ。ハッピー

なエネルギーを持つことで変えてい  
けるものがあると思うんです」。

※ワークレッツシュでは、2月9日(日)午  
前10時〜午後2時と3月16日(日)午前10  
時〜午後6時に、市立公民館で子ども  
のための料理教室を開催します。両日  
とも参加できる小・中学生が対象で、  
定員は30人(応募多数のときは抽選)。  
申し込みは7日(火)〜27日(月)。詳しくは  
問い合わせください。

▼問い合わせ ワークレッツシュ ☎36  
8・7789 (ホームページアドレス  
は <http://workreche.jp/infoseek.co.jp/>)

ワークレッツシュは、子どもが他者や地  
域とつながる中で、自分を発見する場。

和久貴子さん Waku Takako